

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月17日現在

機関番号：33936

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21530747

研究課題名（和文） 児童福祉施設における被虐待児の心理的援助に関する研究

研究課題名（英文） The Study of Psychological Care for the Abused Children in the Children's House.

研究代表

坪井 裕子（TSUBOI HIROKO）

人間環境大学・人間環境学部・准教授

研究者番号：40421268

研究成果の概要（和文）：

本研究の目的は虐待を受けた子どもたちの心理的特徴を明らかにすることと、児童福祉施設における心理教育プログラム作成の試みを行うことであった。その結果、質問紙やロールシャッハ法から、子どもの問題行動、QOL、対人交渉方略の特徴が明らかになった。さらに、児童福祉施設職員からみた子どもの問題の認知と対応の特徴も明らかとなった。施設における心理教育プログラムの試行を実施し、その有効性についても検討を行った。

研究成果の概要（英文）：

The purposes of these studies were to elucidate psychological characteristics of abused children and to make a psycho-educational program in childrens' welfare institutions.

The results of that the characteristics of abused children such as problem behaviors, QOL and interpersonal negotiation strategies were revealed by Rorschach methods and questionnaires. Further results of that the recognition of difficulties for children's problem behaviors by care-workers and their responses in child welfare institutions were revealed.

We also tried to conduct psycho-educational programs in childrens' welfare institutions and to discuss about their efficacies.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|------|-----------|-----------|-----------|
| 21年度 | 1,600,000 | 480,000 | 2,080,000 |
| 22年度 | 1,000,000 | 300,000 | 1,300,000 |
| 23年度 | 800,000 | 240,000 | 1,040,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 3,400,000 | 1,020,000 | 4,420,000 |

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：被虐待児・児童福祉施設・心理的援助

1. 研究開始当初の背景

子どもの虐待をめぐる問題が大きな論議を呼んでいるなか、わが国においては 2000

年に児童虐待防止等に関する法律が施行され、その後も改正が行われており、虐待の発見から保護にいたるシステムは、制度的にか

なり改革が進められている。しかし、児童福祉施設等に保護された後の子どもたちへの心理的な援助については、まだまだ十分な対応がされているとは言い難い。これまで、子どもたちの示す問題とその対応の実際について取り上げた研究の知見は少なく、現場の職員は、試行錯誤のなかで対応に苦慮しているのが実情であった。そこで、子どもたちの示す問題を再確認した上で、実際に子どもたちのケアにあたる児童福祉施設における対応を取り上げることは大きな意味があると考えられる。このような背景から、主に児童福祉施設における被虐待児の心理的援助について、有効な方策を検討したいと考えたのが本研究の出発点である。

2. 研究の目的

本研究の目的は大きく次の二点に絞られる。まず、虐待を受けた子どもたちの心理的な特徴を明らかにすることが第一の目的である。そこで得られた知見を元に、施設内で実施できる心理教育プログラム作成の試みを行うことが第二の目的である。

3. 研究の方法

(1) 子どもの心理的特徴について

児童福祉施設入所児童を対象に、ロールシャッハ法と質問紙法を用いた調査および子どものQOL 質問紙・対人交渉方略質問紙を用いた調査を行った。

(2) 施設職員からみた子どもについて

施設職員を対象に、子どもの問題行動に関する施設職員の認知とその対応を測る質問紙調査および職員への半構造化面接を行った。

(3) グループアプローチの試み

発達障害児の保護者グループを参考に、児童養護施設において、表現療法を用いたグループアプローチの試みを行った。

4. 研究成果

(1) 子どもの心理的特徴について

① ロールシャッハ法と子どもの問題行動の関連について

研究1では、一般群の子どもたちのロールシャッハ反応との比較から、施設の子どもの特徴として色彩刺激への反応性の高さが認められた。またトラウマテック・コンテンツといわれるものの中でも、特にAn（解剖反応）とMOR（損傷内容）が被虐待児に出現率の高い特徴的なコンテンツとして示された。

研究2では、施設職員から見た子どもの問題のチェックリストの結果と、ロールシャッハ反応との関連についての検討を行った。被虐待児の問題行動との関連をみたところ、AnとMORはCBCLでの問題行動との関連が明らか

かとなった。外向的問題はAnとの関連のみが認められ、内向的問題はRの少なさ、FMなどの活動性の乏しさとの関連、および材質反応とも関連していることが示された。

② 施設入所児のQOL

社会的養護の環境にある子どもたちのケアを検討するために、施設入所児のQOLの特徴を明らかにした。QOLでは、情緒的ウェルビーイング、自尊感情、友だち領域、および総得点において、すべての年齢層で一般児に比べ施設の子どもの得点の低さが示された。また、YSRの結果からは、施設の子どもたち自身がひきこもり傾向や攻撃的な行動などの問題を、ある程度自覚していることが明らかになった。

③ 施設入所児のコーピングと適応

児童福祉施設に入所している子どもたちの対処行動パターンを調べるとともに、生活上の適応との関係を明らかにすることを目的とした調査を行った。その結果、施設入所児のコーピングの特徴として、他者の援助を求めることが難しいという側面が明らかとなった。対人的にサポートを求める対処を身につけていけるよう援助していくことが、子ども自身のよりよい適応につながる可能性が示唆された。

④ 施設入所児の対人交渉方略の特徴

児童福祉施設に入所している子どもたちが、対人葛藤場面において、どのような対人交渉方略（Interpersonal Negotiation Strategy：以下INS）を用いる傾向があるのかを明らかにした。施設群の子どもたちは、「交渉」自体が少なく、能動的な方略がとれないことや、解決レパートリーが少ない可能性が示された。

(2) 施設職員からみた子どもについて

① 子どもの問題行動に関する施設職員の認知とその対応

施設で子どもたちのケアにあたっている職員を対象に、①子どものどのような行動が対応しにくいと感じられるのか、②職員はどのように対応しているのかを調査した。その結果、虐待的対人関係の再現や、力によるコントロールを含むものなど、職員が「対応の難しさ」を感じる子どもの行動の構造が明らかになった。子どもの行動の捉え方には、職種による違いがあることも示唆された。さらに、職員の怒りや無力感といった情緒反応は、子どもの挑発的態度によって引き出されるという関連が実証的に明らかとなった。

② 若手職員のインタビューから

子どもたちのケアにあたっている施設職員のうち、特に若手の職員を対象に、半構造化面接を行い、子どもたちとの関わりについて具体的なエピソードを確認した。その結果、虐待を受けた子どもたちは「力関係に敏感」

で、特に若手職員はそのターゲットになりやすいことが示された。職員は、子どもからの挑発などの対応に苦慮し、子どもからの感情を揺さぶられる攻撃に曝されながらも、よりよい方策を求めて工夫していることも明らかになった。

③職員の経験年数と子どもへの対応の変容

職員がどのような経験を通して子どもへの対応の仕方を獲得していくのかについて分析することにより、職員のキャリア発達支援に有用な方策を検討した。経験のある職員は、その場でのセルフモニタリング、行動に対する冷静または柔軟な対応、自分自身に生じた感情の理解、などの面で若手職員との違いが認められた。経験を重ねることで、たとえネガティブな感情を引き起こされても、巻き込まれすぎない工夫ができるようになっていくことが示された。

(3) グループアプローチの試み

①発達障害児の保護者グループから

発達障害など、子どもがなんらかの育てにくさを持っていると、子育てがうまくいかず、極端な場合、虐待に陥ることもないわけではない。そこで保護者を援助するひとつの方策として、グループアプローチを行った。グループで語られることが、保護者の感情や対応にどのような影響があるのかについても検討を行い、保護者のグループアプローチの有効性を示しただけでなく、保護者への援助についてさまざまな可能性を検討し、一定の方向を示すことができた。

②施設におけるグループアプローチの試み

子どもたちが感情のコントロールや対処行動の改善を行うための前段階として、自らの感情表現や他者との気持ちの肯定的な交流の体験を行うことをグループの目的として、コラージュを用いたさまざまな取り組みを行い、その有効性と課題について明らかにした。

(4) まとめと今後の展望

本研究の第一の目的としていた虐待を受けた子どもたちの心理的な特徴を明らかにすることについては、子ども本人を対象としたロールシャッハ法や質問紙法による研究から、いくつかの知見を得ることができた。ただし、被虐待との関連や施設に入所してからの経験、愛着などの要因を含めた詳しい検討は残されており、今後も引き続き、アセスメントを有効活用しながら、子どもの特徴をふまえて、援助につなげていけるような研究を行う予定である。

第二の目的としていた施設内で実施できる心理教育プログラム作成の試みについては、施設内でグループを行ったことで、さま

ざまな課題が見えてきている。しかし、グループの実施は試行の段階であり、今後も施設内で継続的に行っていくためには、さらなるプログラム内容の検討が必要である。

今後の展望として、児童福祉施設における子どものケアや、虐待を受けた子どもたちの援助に貢献できるような研究の継続が必要である。専門性の高い施設職員の育成も含め、施設における子どもの包括的なケアプランを見据えた取り組みも行っていきたいと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

1. 坪井裕子 (2012) 児童養護施設におけるグループアプローチの試み, 臨床心理研究 - 人間環境大学附属臨床心理相談室紀要, **6**, 55-64. 査読なし
2. 坪井裕子・松本真理子・森田美弥子・畠垣智恵・鈴木伸子・白井博美 (2012) 被虐待児のロールシャッハ反応の特徴と問題行動との関連, 人間環境大学紀要「人間と環境 電子版3」, 35-44. 査読なし
http://kiyou.uhe.ac.jp/JHESE3_4.pdf
3. 中西和紀・坪井裕子・高居麻貴・柴原宏子・小島あかね・廣田晋平 (2011) 発達障害児をもつ親のためのグループ活動に関する報告, 臨床心理研究 - 人間環境大学附属臨床心理相談室紀要, **5**, 65-73. 査読なし
4. 坪井裕子・三後美紀 (2011a) 児童福祉施設の職員による子どもの問題行動の困難性の認知と対応行動の関係, 子どもの虐待とネグレクト, **13**(1), 105-114. 査読有,
5. 坪井裕子・三後美紀 (2011b) 児童福祉施設における子どもへの対応に関する若手職員へのインタビューの分析, 人間環境大学紀要「人間と環境」, **2**, 45-59. 査読なし

[学会発表] (計9件)

1. 坪井裕子・鈴木伸子・松本真理子・森田美弥子 (2012) 児童福祉施設入所児の対人交渉方略, 日本発達心理学会第23回大会 (名古屋国際会議場) 発表論文集, 454.
2. 坪井裕子・鈴木伸子・野村あすか・丸山圭子・蒔田玲子・山本明日香・大久保諒・畠垣智恵・松本真理子・森田美弥子 (2011) 児童福祉施設における子どもの対人交渉方略の特徴-場面による検討-, 日本学校心理学会第13回大会 (信州大学, 長野) A7.
3. 坪井裕子・鈴木伸子・野村あすか・蒔田玲子・丸山圭子・畠垣智恵・松本真理子・

森田美弥子(2011)児童福祉施設における
子どものQOL, 日本心理臨床学会第30回大
会秋季大会(福岡)発表論文集 393.

4. 三後美紀・坪井裕子(2011) 児童福祉施
設入所児のコーピングと適応に関する研
究, 日本発達心理学会第22回大会(東京
学芸大)発表論文集 192.
5. 中西和紀・坪井裕子・高居麻貴・小島あ
かね・廣田晋平(2010) 発達障害児を持つ
親のためのグループ療法についてー有用
なプログラムの選定を中心にー, 日本心理
臨床学会第29回大会秋季大会(東北大学)
発表論文集 343.
6. 三後美紀・坪井裕子(2010) 児童福祉施
設職員の子どもへの対応の変容過程ー職
員のインタビュー調査における経験年数
の違いによる検討ー, 日本心理臨床学会
第29回大会秋季大会(東北大学)発表論
文集 534.
7. 坪井裕子・三後美紀(2009b) 児童福祉
施設における子どもへの対応ー職員への
インタビュー調査の分析ー, 日本子どもの
虐待防止学会第15回記念学術集会(大宮
ソニックシティ)
8. 三後美紀・坪井裕子(2009) 児童福祉施
設における子どもの問題行動とその対応
(2)ー職員の対応の分析ー, 日本心理臨床
学会第28回秋季大会(東京国際フォーラ
ム)発表論文集 288.
9. 坪井裕子・三後美紀(2009a) 児童福祉
施設における子どもの問題行動とその対
応(1)ー子どもの行動の分析ー, 日本心理
臨床学会第28回秋季大会(東京国際フォー
ラム)発表論文集 287.

[図書](計1件)

1. 坪井裕子(2010) 第Ⅱ部第8章虐待リス
クアセスメント 88-92p, 第Ⅲ部第4章子
どもの情緒と行動のアセスメント 115-120p,
松本真理子・金子一史編「子どもの臨床アセ
スメント 子ども・家族・学校支援のため
に」, 金剛出版.

[産業財産権]

○出願状況(計0件)

○取得状況(計0件)

[その他]

ホームページ等: なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

坪井 裕子 (TSUBOI HIROKO)
人間環境大学・人間環境学部・准教授
研究者番号: 40421268

(2) 研究分担者: なし

(3) 連携研究者

三後 美紀 (SANGO MIKI)
人間環境大学・人間環境学部・助教
研究者番号: 60533255